

第6回 城端地域学校のあり方検討委員会（会議記録）

【日時】令和8年8月28日（金） 開会：午後7時00分 閉会：午後8時33分

【場所】城端小学校

【出席委員】 水上 和夫 委員長 松居 裕 副委員長 松本 久介 委員
堀川 工望 委員 安居 範光 委員 山根 正行 委員
勇崎 香志 委員 稲場 えみ 委員 大西 立修 委員
古軸 裕一 委員 近川 利行 委員 嶋田 裕樹 委員
山下 茂樹 委員

【欠席委員】 松井 渉 委員 夏梅 紘行 委員 安達 正彦 委員
和田 弘恵 委員

【事務局員】 教育長 松本 謙一 教育部長 氏家 智伸
教育総務課長 片田 健一 教育総務課副参事 金谷 諭
教育総務課主幹 小谷 篤史 教育総務課副主幹 青能 順子
教育総務課副主幹 北島 一朗 教育総務課主任 井上 健

【傍聴者】 2名

【会議要点】

- ・小中一貫教育の形態は、「義務教育学校」にすることとした。

【会議記録詳細】

1 開会

2 委員長挨拶

（委員長）

前回の第5回検討委員会では、中学校の機能を城端地域に残すこと、そして、校舎は現在の城端中学校の校舎を使用することを決定しました。

校舎を一つにした小中一貫教育の形態については、教育委員会からは「義務教育学校が望ましい」という見解を出されていますが、小学校と中学校をそれぞれ残した「小中一貫型小学校・中学校」も可能性として考えられるところです。今回は、どのような形で統合するかについて、色々なご意見をいただきながら、まとめたいと思います。

3 報告事項

- ・第5回検討委員会（令和8年7月1日）議事録について

資料1に沿って、第5回検討委員会の会議の要点を確認した。また、小中一貫教育の形態に関する南砺市教育委員会の見解として、「子どもにとってよりよい教育環境を築く観点から義務教育学校が望ましい」と考えている旨を再度伝えた。

（委員からの質疑応答なし）

4 協議事項

(1) 小中一貫教育の形態について（「義務教育学校」と「小中一貫型小学校・中学校」）

（委員A）

義務教育学校は、利賀地域や平・上平地域のように、地理的に他地域の学校と統合することが難しい地域で見られるものだと思います。また、義務教育学校とすることで、中学校の教科を指導するために必要な多くの教員数を、小学校の教員からうまく融通することによって補うという考え方もあるかもしれません。そのような地理的・規模的な要因から、義務教育学校を選択したほうがよい地域がありますが、城端地域で義務教育学校にする理由は全く見当たりません。一つの校舎で、小学校と中学校が、それぞれの校長の下で運営を行う「小中一貫型小学校・中学校」が最適であると考えます。

富山市をはじめとする多くの自治体でも、小中一貫型小学校・中学校を選んでいるケースが多くなっていると聞きます。南砺市の平野部において、あえて義務教育学校を選択する意義は、今となってはほとんどないのではないのでしょうか。

（委員長）

私の個人的な見解を申し上げますと、義務教育学校であっても、小中一貫型小学校・中学校であっても、教育的にそこまで大きな違いはないと思います。小学校は小学校として、中学校は中学校として、それぞれ独立して充実した学校生活を送ってほしいと思っています。

義務教育学校になると、職員会議も1年生から9年生までの全教職員が一緒に参加することになりますが、中学校の進路指導など、小学校の教員には直接関係のないものもあります。こうした点からも考えると、複式学級がある利賀学舎や五箇山学舎は、義務教育学校にしたほうがよいと思いますが、城端地域は、小学校と中学校を残した形である小中一貫型小学校・中学校が適しているのではないかと考えます。

（委員A）

教育委員会で義務教育学校を推進する流れが、いつのまにかできているように感じます。ただ、城端地域は、小学校・中学校がそれぞれの良さを活かし、9年間の教育を、小学校と中学校で協力・連携しながら進めるのがよいと思います。

（委員長）

義務教育学校にする場合は、今の城端小学校と城端中学校を閉校することになるのが、一番気になります。これまでの城端小学校と城端中学校の歴史もなくなります。義務教育学校にせず、小学校は小学校、中学校は中学校としてそのまま残しても、運動会を合同で行うなど、連携を取ることはできます。そのほうが子どもたちも幸せですし、学校にとってもよいと思っています。皆さんのご意見をお聞かせください。

（委員C）

子どもの成長という視点から意見を申し上げます。小・中学校が別々のほうが、小学校6年生が最高学年としてのリーダーシップを育めるというメリットがあると思います。自分の子どもを見ていても、そのように感じる場合がありますので。また、6年生で一回区切ったほうが、大規模が学校がよいなどの理由で他地域の中学校への進学を希望する子どもたちにとっても、よいと思います。ただ、一長一短あると思いますので、義務教育学校にした場合、

子どもたちにとって、どのようなメリットがあるのか教えてください。

(事務局)

先ほど「義務教育学校は規模が小さい地域のもの」というご意見がありましたが、富山県内では、富山市の水橋地域に大規模な義務教育学校が設置されましたし、上市町でも、町内の全小学校と中学校を統合して義務教育学校を設置する案があります。東京都品川区では、区内にあるの31の小学校のうち、新入学生に人気がある上位4校は、全て義務教育学校です。また、岐阜県各務原市でも、現在25校ある小・中学校を、11校の義務教育学校に再編する計画が進められています。このように、学校規模の大小にかかわらず、全国的に義務教育学校化の流れがあります。

さて、身近な例として、義務教育学校の開校から5年が経過した南砺つばき学舎の事例を紹介します。南砺つばき学舎では、1年生から英語の学習ができたり、授業を5時間目で終了させ、残りの時間を「自学の時間」として、苦手なことや、やりたいことを自分で選んで取り組める環境を整えています。また、5年生から部活動に参加することもできます。南砺つばき学舎には、現在89人の子どもが在籍していますが、そのうち23人が、同校の学習内容や環境を選び、井口地域外から通学しています。このような取組が実現可能であることが、義務教育学校の最大のメリットだと考えています。

小中一貫教育をするにしても、小学校と中学校の校長がそれぞれいると、「英語教育を1年生から導入しよう」、「5年生から部活動を始めよう」という提案があったとしても、校長の意見が合わずに実現が難しいということもあります。

(副委員長)

城端小学校が今年で60周年、中学校が来年で80周年ということで、学校がこのまま年月を積み重ねていけるならば、それに越したことはありません。しかし、この検討委員会が立ち上がったときから話しているとおり、「子どもたちにとって一番よい教育環境とはどういうものなのか」という視点で検討する必要があります。

義務教育学校か、それとも、小中一貫型小学校・中学校になるかによって、生活スタイルや働き方が変わるのは、子どもたちと学校の先生方です。学校の先生方が働きにくくなると、子どもたちの教育環境もよくないものになります。前回の検討委員会で、先生方から幅広く意見を聞いてほしいとお願いしましたので、その結果を共有いただければと思います。

(事務局)

前回の検討委員会で、「義務教育学校と小中一貫型小学校・中学校のどちらがよいかは、専門的すぎて判断が付かないので、先生方の意見を聞いてほしい」というご意見もありましたので、校長会と教頭会で意見を聴き、まとめていただきました。

(オブザーバーA)

南砺市内の小学校長と教頭に、この会議の進捗状況をお伝えし、アンケートを取りました。南砺市で勤務している先生は、義務教育学校での勤務経験はあっても、小中一貫型小学校・中学校に勤務したことはないので、想像も含めた意見になるかと思います。

まず、義務教育学校のメリットとして、「9年間を見据えた一貫性のある学習指導及び生徒指導ができること」、「小・中学校の教職員がワンチームとなって、目の前の子どもたちを見

つめ、育てることができること」、「教員の高い専門性を活かした授業ができること」、「校長が一人なので、方針が一つで全員でベクトルを揃えて進めることができること」、「迅速な意思決定や組織運営ができること」が挙げられました。

一方で、義務教育学校のデメリットとして、「9年間のエスカレーター式となるため、進学に伴う環境の変化や、子どもたちの“中学校から新しい自分に生まれ変わりたい”といった気持ちの切替えの契機が失われやすいこと」が挙げられました。

続けて、小中一貫型小学校・中学校のメリットとして、「小学校・中学校それぞれの段階における特性を活かした従来の指導が維持できること」、「小学6年生が最高学年としてリーダーシップを取って学校に関わる経験ができること」が挙げられました。

反対に、小中一貫型小学校・中学校のデメリットとして、「同一の校舎であっても、組織が別であるため、心理的な垣根ができて一体感が生まれづらいかもしれないこと」、「調整する時間がどうしてもかかること」が挙げられました。

最終的な意見を集約した結果、小学校長は「義務教育学校を支持が4人、判断不可が2人、小中一貫型小学校・中学校を支持がゼロ」で、小学校教頭は「義務教育学校を支持が6人、判断不可が4人、小中一貫型小学校・中学校を支持がゼロ」でした。

(オブザーバーB)

南砺市内の中学校長と教頭に、「自分が校長・教頭になったら」という想定で、考えてもらいました。まず、結論から申し上げますと、最終的な意見を集約した結果、中学校長は「義務教育学校を支持が5人、判断不可が2人、小中一貫型小学校・中学校を支持が1人」で、中学校教頭は「義務教育学校を支持が8人、判断不可と小中一貫型小学校・中学校を支持がゼロ」でした。

義務教育学校に対する意見として、「9年間を見通した継続的な教育ができる」、「専門性を活かした乗入れ授業ができ、中学校の専門免許を持っている教員が小学校高学年に教えることで小学校の教員に時間的余裕ができ、研修や教材研究をしてスキルアップができて働き方も改善できる」、「小学6年生の育ちが懸念されるが、工夫して区切りをつけることは可能であり、その上で、中学生の姿が近くで見られるのはよい」、「校長が1人で、教員1人の加配があることは大きなアドバンテージである」、「学校経営を一本化しやすい」といったものがありました。

一方で、小中一貫型小学校・中学校に対する意見として、「これまでの学校を変える必要がないのがよい」、「行事も既存のままなので負担が少ない」という肯定的な意見がありました。が、「同じ校舎に別の教職員組織があることは、子どもにとってよいことなのか」、「同じ校舎内で職員が小・中学校でと完全に分かれてしまうなら、校舎を一緒にするメリットがないのでは」、「小・中それぞれで管理が必要になるので、業務が重複したり二重構造になってしまう」、「校長の意見が異なると現場が混乱する」という意見もありました。

総合所見として、「義務教育学校として一体化することが最も適した形であるし、城端地域の未来にとって最も望ましい姿である」、「規模の大きな学校に行きたい場合は、特認校制度を利用できるので、城端地域に中学校を残せばよいと思う」ということでまとまりました。

ただし、小中一貫型小学校・中学校を支持した校長の意見として、「義務教育学校にすると、

小・中学校の閉校と義務教育学校の開校のための作業に時間と労力がかかる。将来的な市全体での統合を考えたときに、再び小学校と中学校に戻るケースになった場合、無駄が出るのでは」というものがありました。それに関連し、「開校や閉校、校旗、校章、校訓、校歌が変わるのが負担という理由で、義務教育学校にすることを躊躇するのであれば、それらの作業を必要最低限にして、校名も現在の校名を引き継ぐなどの方法を探れないか」という意見があったことは申し添えます。

(委員長)

教育委員会が義務教育学校を推進しているので、校長や教頭へのアンケートで、義務教育学校を支持する意見が多く出るのは当たり前のように思えます。また、乗入れ授業ができてよいというのは分かります。ただ、例えば、運動会で中学3年生が小学1年生の面倒を見ることを考えたときに、果たしてそれを美しい姿と見るのか、それとも、真に中学生として青春を謳歌できているのかと考えてしまいます。

(委員H)

先生方のご意見が「義務教育学校がよい」ということは分かりましたが、城端地域に義務教育学校を設置してから間もないうちに、市全体で学校を統合する事態にもなれば、それはさすがに問題です。その点を先に押さえておく必要があります。

(教育長)

南砺市立学校のあり方検討委員会では、市全体での学校統合は、およそ20年後を想定しています。それが少し早まることはあるかもしれませんが、今から5年後といった短期間のうちに、市全体での学校統合はないことを、南砺市立学校のあり方検討委員会でも確認しています。

(副委員長)

先ほど中学校長からの意見として、「義務教育学校を選択した場合に校旗、校章、校訓、校歌が変わるのは負担であることを理由に義務教育学校にすることを躊躇するのであれば、負担がかからない形にしてはどうか」とありましたが、それは可能なのでしょうか。

(教育長)

校名はもちろん変わりますが、例えば、五箇山学舎では、元の上平小学校と平中学校の制服をそのまま継続して使っていますし、校歌も歌詞の一部だけ修正して第一校歌、第二校歌として残しています。このように、手間をかけない形で行うことはできます。

(委員A)

中学校に必要な教員数を確保し続けられるだけの子どもの数を、これからも維持できると思えません。

(教育長)

教員の数は学級数で決まるので、今後15～20年は必要な数を確保できると考えています。少なくとも、複式学級は編制されないと思います。

(委員C)

仮に、20年後に、南砺市全体で統合校が設置されることが確定した場合、義務教育学校から、市全体の統合校にスムーズに移行できますか。すなわち、今、城端地域に義務教育学

校を設置することを選択した場合、将来的に市全体での統合中学校ができた場合、城端地域の義務教育学校を、小学校と中学校に再び分けることは可能でしょうか。

(教育長)

もちろん可能です。

(委員 I)

南砺つばき学舎の保護者の方と話す機会がありましたが、井口地域の方は、南砺つばき学舎に非常に満足されています。また、小学校のスポーツ少年団や中学校の部活動に携わっていると、先生方と話す機会もありますが、先生方からは「この検討委員会などでも教員の意見を聞いてほしい」という意見を耳にします。その意見が、今日発表されたアンケートの結果だと思いますし、それは尊重すべきだと思います。

長年、子どもたちを見ていて思うのは、以前に比べ、今は手のかかる子どもが多いということです。現場の先生方を見ているとすごく疲弊していると感じます。ですから、現場で動ける教員が1人でも加配されることは、非常に大きなメリットだと考えます。そういったことを考えると、城端地域に義務教育学校を設置すべきだと思います。

(委員 B)

教員が1人加配されるというアドバンテージがあるとのことですが、将来的に南砺市全体で中学校の統合が進めば、市全体としての教員数は少なくても済むと思います。教員になる人が少なくなっているという話も聞くので、必要な教員数を確保するとなると、教員の質の問題も気になります。

(教育長)

今後、教員の倍率が上がる時代が来ると思うので、教員の質の問題は大丈夫だと思います。

(委員 C)

選択肢は、義務教育学校と小中一貫型小学校・中学校の2択ですが、3択目として「最初に小中一貫型小学校・中学校にして、いずれ義務教育学校にする」という選択肢を設ける可能性はありますか。

(教育長)

その選択肢は無しにしてください。今回の統合は、今後20年間を考えたものであり、その途中で学校の形態を変えるというのは、望ましくありません。

(委員 E)

教員の配置や、授業の乗入れについて確認です。義務教育学校は乗入れ授業ができることは分かりましたが、小中一貫型小学校・中学校の場合、中学校の先生が小学校の教員免許を持っていても、小学校に教えに行くことはないということですか。

(教育長)

基本的にはありません。乗入れ授業ができるのは、義務教育学校だけだと考えてください。

(オブザーバー B)

小中一貫型小学校・中学校の場合は、教職員組織が別なので、行事を協力して実施するということはありえますが、授業、場合によっては、研修も一緒にやることはないと思います。

(委員E)

この検討委員会で決定するに当たっては、多数決にするのか、それとも、話し合いで全員が同じ方向を向くようにするのかわかりませんが、委員の皆さんのなかで、「どうしても小中一貫型小学校・中学校にしないといけない」とお考えの方は、どれほどいらっしゃるのでしょうか。

(委員長)

これまでの話の流れとしては、義務教育学校を設置することになるかと思いますが、それでよろしいでしょうか。どうしても小中一貫型小学校・中学校がよいという方がいなければ、城端地域も義務教育学校を設置するということで決めたいと思いますが、いかがでしょうか。

－ (委員からの異議なし) －

それでは、城端地域に義務教育学校を設置することで、進めることとします。

(委員H)

最後に確認ですが、今の城端中学校の校舎に改修が必要なのか、また、小学校を入れるだけのスペースが足りているのかを教えてください。

(事務局)

改修は必要ですが、スペースは問題ありません。

5 次回委員会の日程

事務局から、次回の検討委員会では統合時期と提言書の内容について協議し、開催時期は10月上旬から10月中旬頃で調整する旨を伝えた。

また、次回の検討委員会をもって、城端地域学校のあり方検討委員会が終了する予定であることも申し添えた。

6 副委員長挨拶

(副委員長)

1年半以上に及ぶ長い期間をかけ、前回の検討委員会で「小学校・中学校の機能を城端地域に残すこと、校舎は城端中学校を使用すること」を決め、そして、本日で「義務教育学校」とすることに決めました。この決断が、城端の子どもたちにとってベストな選択になることを願う次第です。

「子どもは家庭で育て、学校で鍛え、地域で磨く」という3本柱が重要です。次回がこの委員会の最後になりますが、引き続き委員の皆様には、城端地域の子どもたちの健やかな成長を見守ってくださいますよう、お願い申し上げます。